

みなと MIO MACH ケンチクさんぽ vol.15

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

諏訪山の歴史に触れて

みなと元町近辺から坂道を上り、1キロほど先の「諏訪山公園」へ向かいました。個性的な飲食店が並ぶ繁華街から生田新道を越えると、落ち着いた街並みに変わります。この辺りは行政の中核施設が集まる、いわゆるシビックゾーンです。さらに坂道を進むと住宅が増え、点在する学校や教会が見えてきます。立派な日本庭園をもつ相楽園があり緑豊かなエリアです。その先のバス道、山麓線までは、みなと元町から歩いて15分ほどです。名前の通り山の麓の曲がりくねった道です。山麓線から「諏訪山公園」へは登山道を上れば到着です。ここまで神戸港から2キロ足らず。海から山までの間に産業、文化、暮らしの都市機能が積層になって存在しています。横に長い神戸の市街地は縦断すると変化に富んだグラデーションがおもしろい。改めて繁華街から山の中まで、わずかな距離だと分かりましたが坂道がきついので縦断するのは結構大変です。



ビーナスブリッジ

神戸港開港後は諸外国との交流が始まり、明治6年、兵庫県は“公園がないのは文明国らしくない”と諏訪神社境内一帯を公園に指定しました。当時、諏訪山公園は生田川、居留地東と並び神戸三公園と呼ばれたそうです。公園の中央に位置する広場が金星台と名付けられたのは、明治7年にフランスから来た観測隊が、この辺りで金星の太陽面通過観測を行った場所だからということも広く知られているのではないのでしょうか。これにより日本の経度が確定し日本標準時の基盤となる子午線が定められた歴史的な観測でした。明治36年に第五回国内勧業博覧会が大阪で開催されたときには、協賛行事として公園内の標高約180mの場所が切り開かれ展望台として整備されました。明治44年に出版された「西摂大観」では“神戸の地到るところ山海の景勝に富むといえども諏訪山に比肩するもの殆ど稀なり”と諏訪山からの眺望について絶賛され、日露戦争祝賀会や観艦式見物の絶好の場所として親しまれました。時代は変わり昭和46年には展望台と金星台を結ぶ位置に「ビーナスブリッジ」が作られ人気の眺

望スポットになっています。全国的には名前の由来となった金星台より、こちらの方が有名ではないでしょうか。

昭和3年には諏訪山公園内に動物園が作られました。動物園は昭和26年に閉園し「王子動物園」に移されましたが、跡地は「こどもの園」として整備され児童公園となっています。私も小学生の頃に何度か訪れ、ここの滑り台は「王子動物園」「須磨離宮公園」と並び神戸三大滑り台と勝手に思っていました。この頃はいつも多くの子供たちで賑わっていた覚えがあります。「こどもの園」には動物の檻の跡を活用した遊具など、動物園の痕跡が見られます。それから50年近く経ち、今ではかなり荒れてしまっていますが何とか公園として残っています。この8月末から「ビーナスブリッジ」は改修工事が行われていますが、「こどもの園」には手が掛けられない様子です。町を見渡せる緑豊かな都市公園ともなれば人気の場所になりそうですが、神戸の場合、思いつくだけでも「保久良神社」「灘丸山公園」「布引の滝」「会下山公園」などいくつもあり、



こどもの園

如何せん恵まれ過ぎているためか人気の場所とは言えなさそうです。

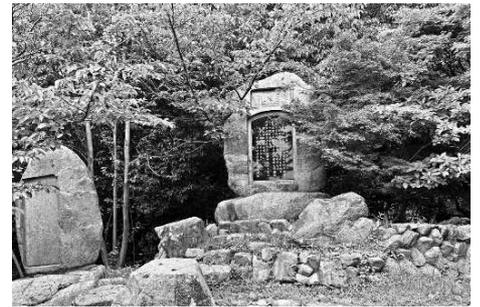
かつて諏訪山には夏目漱石も訪れたという諏訪山温泉がありました。諏訪山温泉を開発したのは県の官吏とのことですが、その後一大歓楽街にまで広げたのが大阪出身の前田又吉です。又吉は明治6年、諏訪山麓に温泉が出たことに目を付け、花隈で経営していた料亭「常盤花壇」を諏訪山に移し、それを「常盤楼」と名付けました。明治15年には3棟にまで増やし諏訪山を、花隈を凌ぐ繁栄の地としました。明治21年には京都進出を図り、現在の「ホテルオークラ京都」(京都ホテルグループ)につながる「常盤ホテル」を創業しました。その後、諏訪山の温泉街は太平洋戦争の空襲で焼失し、温泉街の入り口にあった前田又吉の銅像や、温泉街を示した石碑も京都ホテルグループに引き取られ、今では諏訪山温泉の痕跡は何も残っていません。

金星台には「海軍営之碑」という石碑があります。海軍営とは元治元年に勝海舟が作った海軍操練所のことで、石碑には海舟直筆の碑文が刻

まれています。將軍徳川家茂が海防巡視に小野浜の海軍操練所で床几を据えられた跡を残すために作られた碑とのことですが、海軍操練所が閉鎖となり大正15年に山の上のこの地に置かれました。今では高い建物に遮られてよく見えませんが、当時はここから港が一望できたことでしょう。新港町にある「海軍操練所跡碑」は有名ですが、こちらの碑はあまり知られていないのではないのでしょうか。元々この碑が置かれるはずであった小野浜と金星台を直線で結んだちょうど中間には三宮神社があります。ここに「神戸事件発生地」と記された石碑が置かれています。神戸も明治維新の舞台のひとつであったことを今に伝えていきます。

東日本大震災で津波に襲われた町には、先人たちにより地震や津波に関する教訓が刻まれた石碑がいくつもあることをニュースで知りました。現在では大事なことを伝承するため、石碑に刻むという意識はないので刻まれた教訓は活かされなかったそうです。

かくいう私も普段石碑に目を向けることはほ



海軍営之碑

んどありませんが、こうして“ケンチクさんぽ”してみても石碑に触れ、まさしく今いるここに何があったのか、歴史的にどんなところだったのかを知るきっかけになりました。石碑に限らず、建物や工作物、自然の樹木などでも同様に、その場所の成り立ちを後世に伝える役割を担っているものは、いろいろあると思います。

神戸の町は、これまで空襲や水害、震災に見舞われ、その度に様変わりを余儀なくされてきました。そんな神戸だからこそ、そこに暮らす人々が過去を共有することで、未来の文化につながると思います。そのためにも永続的に存在することで場所性をもって歴史を伝えることができるものを再認識し、守り、残していかなければならないと感じました。



久保田 淳司(くばた じゅんじ)

ディーオーケープランニング

神戸LAB代表

/一級建築士

/インテリアコーディネーター